

5月17日（日）主日礼拝レジュメ

「人生はみな同じ結末」 伝道者の書2章14, 15節

14節で「知恵のある者は頭に目があるが、愚かな者は闇の中を歩く」とは、冴えた頭脳を表しているのか？愚かな者は、人生を生きる上で常に恐れや不安があり、また生きる中で起こりくるトラブルや人間関係などのさまざまな問題に対処することができず、そのままつまづき倒れて起き上がることができないということもあるだろう。そう考えると、愚かな者が人生においては何かを成し遂げるということはないだろうと思い、伝道者は知恵のある者は愚かな者にまさっていると結論づけようとしたのではないか。

ところが、伝道者に一つ大きな問題があった。それは、「しかし私は、すべての者が同じ結末に行き着くことを知った」ということ。新改訳2017では結末と訳されているが、運命とも訳されている言葉。ここでの結末とか運命と訳されているヘブル語ミクレーは、何かが起こることを意味しているのですが、それは決して予期しない、予定外のことが偶然に起きるということの意味していない。むしろ、ここで言う「同じ結末」とは、死を意味している。死は予期しないかたちで来て、死はすべての者に同じように訪れて、何の区別もない。だから、15節で「私は心の中で言った。私も愚かな者と同じ結末に行き着くのなら、なぜ、私は並外れて知恵ある者であったのか」と言う。並外れた知恵を持っても愚かな者たちと同じように死という人生における同じ結末を迎えることとなるのであれば、「これもまた空しい」ということになる。

死はすべてを空しくします。多くの人たちが死とは何か、なぜあるのかと考える。聖書は明快に死とは何かを語る。それは、人の罪を通して人類に入ってきたと教え、神の前にすべての人が死という同じ結末を迎えることとなる。そして、死に対して人はどうすることもできないが、神が死に対する解

決の道の一つだけ備えられた。それは、罪のないイエス・キリストが私たちの罪をその身に負い、私たちが受けるべき罪のさばきを代わりに受けてくださり、そのイエス・キリストを信じることにより私たちの罪が赦される。罪が赦されても、罪を赦されていない人たちと同じ結末として死を迎えます。しかし、キリストが十字架で死なれましたが三日目に死からよみがえられたように、私たちも死からよみがえらせ、神が備えてくださる新しい天と新しい地に迎えられます。ここは同じ結末ではない。死に向かって闇の中を歩むような人生ではなく、死からのよみがえりを信じ、光の中をまっすぐに歩んでいく人生がある。そして、私たちが神を信じて新しい人生を歩み出し、神の御名によってなしたことについては神が報いてくださる。ここに空しくない人生がある。